博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	武田　一文
論　文　題　目	ビザンティン聖堂装飾における「聖母の眠り」図像研究

審査要旨

本論文はビザンティン美術における、聖母の死を描いた「聖母の眠り Koimesis tes Theotokou」図像の図像学的研究である。イコンや写本挿絵は対象とせず、聖堂装飾（フレスコ、モザイク）を分析する。正教で 8 月 15 日に祝われる「聖母の眠り」は、聖堂装飾においても重要な位置を担う。しかし伝承そのもののテクスト研究に比べ、図像としての「眠り」は概論的な取扱いに留まってきた。一見すると伝承を忠実に絵画化しただけのような「眠り」は、その図像学的平凡さが研究者の注意をさほど惹かなかったものであろう。本論文は世界でも初めての「聖母の眠り」図像のモノグラフ研究である。

第 1 章では 7 世紀のテサロニキ大主教ヨアンニスの説教を基に「聖母の眠り」伝承の概略を追い、またビザンティン時代の代表作例と共に図像学的要素を確認し、以後の議論の前提とした。テサロニキのヨアンニスによる説教は、晩年のマリアの死の 3 日前より物語を始め、最後にはマリアの空になった墓についてまで述べる。他の教父説教と比較すると、語り手ヨアンニスの主観表明が少なく、登場人物の台詞と状況説明に徹する点で、テクストとイメージの関係を考える際に有用である。主要作例に関して時系列順に、a. 定型化以前、b. 定型化、c. 複雑化とその後、の三段階に区切り各段階の作例を分析する。

第2章はカッパドキアとクレタ島の作例を網羅的に採りあげ、帝国周縁部における図像学的分析を行った。カッパドキアには 7 世紀から 13 世紀の作例が見られ、クレタは 14・15 世紀の作例が集中する。特に「（伝統が）保持されたもの」と「変化したもの」を比較することによって、図像がどのようにビザンティン人に見られていたのか、という受容的側面を考察する。カッパドキアでは古様の図像が 13 世紀に至るまで用いられ、クレタ島においても古い型が保存されている。地理的に孤立した環境により、手近な作例を参考にしながら作品を描き続けることになった故であろう。

第3章は「聖母の眠り」図に現れる個別の図像学的モティーフを論じた。第1節では、当該図像において十二使徒がどのように描かれたかを考察する。「12」という象徴的な数字を敢えて変更した作例に関して、ラ・マルトラーナ（パレルモ）（使徒 13 人）、コーラ修道院（イスタンブール）（使徒 11 人）は、いずれも献堂者の意思が反映していることが看てとれる。

第 2 節では、バルカン半島の 6 聖堂にフレスコを描いたことで知られる画家ミハイルとエウティキオスの図像について考察した。各作例の特色として「聖母被昇天」と「ユダヤ人イェフォニアス」という西欧の影響が強いモティーフの追加が見られた。ビザンティン美術史に名を残した二人組の画家は、「聖母の眠り」図においても際立った個性を示していることが明らかとなった。

第 3 節では「ユダヤ人イェフォニアス」エピソードの時代背景について考察した。西欧に比して、ビザンティンでは「反ユダヤ的」図像はほとんどないが、本図像の「手を切断されたユダヤ人」は例外的存在である。潜在的なユダヤ人への敵意が、西欧で燃え上がる反ユダヤ主義によって強められたことが推測できる。

第 4 節はポロシュキ修道院（マケドニア）の「眠り」図に関する考察である。キリストが身を屈めてマリアに口づけをするという特異な作例である。ポロシュキの「眠り」は、その悲しみの表現と構図から「ピエタ（聖母の嘆き）」のような受難図像を想起させたであろう。一方で「眠り」のエピソードは、母子の愛情の表象という側面を持っていた。「母子の愛情」が強く打ち出されたのがポロシュキと言えるが、その背景には献堂者母子の歴史的状況が存在する。

第 4 章は、聖堂全体の装飾プログラムにおける「聖母の眠り」図像の位置を問うたものである。特に着目したのは、聖堂という空間内で信徒がどのように動き、いかにして図像を眺めたのか、という動的な視点である。カス

氏名　武田　一文

トリア（ギリシア）のパナギア・マヴリオティッサ修道院主聖堂は、ナオス（本堂）西壁に「聖母の眠り」、ナルテクス（玄関廊）に「最後の審判」を描く点で、貴重なプログラムを提供してくれる。両図像の結合を考えるためには、聖堂内での信徒の動線を再現しなければならない。まず玄関廊に描かれた恐ろしげな「最後の審判」を眺めた後、本堂に進み、信徒は祈りを終える。そして聖堂から退出する信徒の前に、扉口上部に描かれた「聖母の眠り」が現れる。キリストに抱かれたマリアの魂は、教父の説教によれば正しき者の魂もまた重ねることの出来る存在であった。かくして、聖母は一般信徒の代表として、キリストによって救済される見本となる。聖堂を訪れた人間に「救済」と「応報」の双方を示すのが、「聖母の眠り」と「最後の審判」の作り出す装飾プログラムであった。

以上 4 章をもって、筆者はビザンティン聖堂装飾における「聖母の眠り」図について、基本資料を提供しつつ多角的な考察を行った。先行研究で等閑視されてきた図像のモティーフが持つ複雑な史的背景、聖堂装飾プログラム中での機能といった美術史学的な指摘だけでなく、ビザンティン帝国の歴史・地理的問題、また当時のパトロン、信徒の心性に迫ることを試みた点に特長がある。審査委員会の席上では、今後の課題とともに、論理の弱さもいくつか指摘された。カッパドキアについては、困難な状況の中でのフィールドワークが評価されるが、クレタ島に関しては先行研究の言及に従う部分がほとんどで、実見が不足している。ラ・マルトラーナ聖堂の例では、13 人の使徒中 2 人を現実の歴史的人物に充てるのは、傍証のない議論である。聖堂装飾における「聖母の眠り」の網羅的カタログを作成するのは不可能にしても、主要な作例のリストを附録とすべきであった、等々。しかし欧米含めても初めてとなる「聖母の眠り」の図像学モノグラフであり、聖堂装飾全体の中で、信徒の動きと併せて図像の機能を解明した点は、大いに評価できる。審査委員会は全員一致で、本論文が早稲田大学の博士学位に相応しいものと判断した。

公開審査会開催日	2019 年　1 月　26 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	益田　朋幸	ビザンティン美術史	博士（テサロニキ大）
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	児嶋　由枝	西洋中世美術史	博士（ピサ高等学院）
審査委員	金沢大学歴史言語文化学系・准教授	菅原　裕文	ビザンティン美術史	博士（早稲田大学）
審査委員	埼玉大学大学院・人文社会科学研究科・准教授	辻　絵理子	ビザンティン美術史	博士（早稲田大学）
審査委員				